

「とらやの茶の間」― 佐藤幹夫&「ふるさとの会」メールマガジン  
ルポ ふるさとの会「相談室ふらっと事例検討会議」(第1回)

事例検討会議6年を経て

フリージャーナリスト 佐藤 幹夫

1.

### 「非人間的人類」について

最近、最相葉月さんの新刊『れるられる』(岩波書店)を拝読した。タイトルは、様々な「する／される」の境界をめぐる、という意味が込められたものであり、「私(彼)は、なぜこちら側で、あちら側ではないのか、あちら側とこちら側とを分けているものは何か」という一つのモチーフを追いかけた連作短編エッセイ、とでもいうべきスタイルが採られている。

詳細は著書にあたっていただければ嬉しいが、本書のなかで、分子生物学者で、故・渡辺格の言葉が引用されている章があった。「断つ・断たれる」と題され、科学研究のすこぶるハードな状況と、科学者たちがそこで、いかに生き残り競争を余儀なくされているかについて述べた章である。

渡辺は、自身の著書『人間の終焉 分子生物学者のことあげ』のなかで、次のようなことを書いているという。

「各人に選択が可能な多様化社会」はこの限られた地球上では所詮「夢物語り」にすぎず、生き残れるのは、「現在のわれわれのような〈愛すべき俗人〉ではなく、いずれにしても非人間的な人類であろう」と述べている。(P102・強調引用者)

著者(最相さん)はここから、科学技術が亡国へと向かうことにならないかという危惧を述べ、この章を終える。これは著者が積年追いかけてテーマであり、著者に固有の着眼からなされる問題提起となっている。

ところで、筆者(佐藤)がこの渡辺格の言葉から受け取ったのは、また少し別のことだった。それは、いままさに我われは、彼の言う“非人間的な人類”を目指してまっしぐらに進んでいる、という実感だった。

この人類の2分類は、いま私たちが直面している「格差社会」と呼ばれるあり方に符合しているのではないか、という論証のほとんど不可能な第2の実感をもたらす。それが、経済原理が最優先される現代の資本主義と結託したとき、まさにピケティの『21世紀の資本』が分析した世界の露出となる。

### 「非人間的人類」の意味するもの

なにが“非人間的”で、なにが“人間的”か。

簡単な例え話をしよう。

サッカーでも野球でも、テニスでも何でもよい。スポーツにあって、次のようなプロセスは、多くの人が経験しているはずである。

好きなスポーツを始める。相手は友だち。お互い、そのスポーツが好きでたまらない。

やがて遊びがトレーニングになり、それがくり返される。その中身は段階を追うごとに専門化する。自分で必要な分だけ練習する、という牧歌的なやりかたは次第に通用しなくなり、専門のコーチが付き、さらに走力、守備、打撃、作戦（戦術）と指導者側はより専門分化していく。

さらには栄養管理やメンタルトレーニングが導入され、専門のトレーナーによるメニューが示される。それぞれのトレーナーは、筋力や走力、肺活量など、細かな数値を示し、数値がどれだけ変化しているか、逐一その状態をエビデンスとして提示してくる。それをもとに次の目標が設定され、あらたなトレーニングメニューがつけられることになる。

ざっといって、こうした過程がある。このどこかの地点で、ただの野球少年やテニスボーイは、ふるい落とされる。生き残るのは、野球が好きでたまらなかつた野球小僧やテニスボーイではなく、鍛え上げられた頑健な身体と、神業としか思えない技術と、タフなメンタルを兼ね備えた、およそ「愛すべき俗人」とはまったく逆のタイプである。

スポーツを例えとして述べたが、私たちの社会は、このように、専門分化を精緻にする方向に進んできた。生きていくためのスキルをいかに獲得するかということに関し、時代を追うごとに専門分化させ、上級の職種につくためには、専門の（かつ優秀な）トレーナーに付き、より高度な訓練を受けなくてはならなくなった。

そこで獲得されたスキルと資格は、2、3年を経てさらに向上がめざされ、これをやり続けていくことが、生活の安定を保障する基本条件となった。

言い換えれば、「有能」な社会的戦力であり続けるためには、進化するトレーニングメニューと絶えず格闘しなければならず、長期間にわたって（70歳定年になるかもしれない近い将来は、50年にも及ぶ時間）、この、苛烈なサバイバルのなかで生きていかななくてはならない。勝ち抜くことこそが、「優秀」で「有能」であることの証とされる。これが現代社会の大きな特徴である。

さて問題は何か。

専門性をはてしなく求めるそのこと自体が、「非人間性」を生むのではないと思う。スキルを磨き、プロとしての腕を練磨していくことが、つまり「優秀」で、「有能」であることそれ自体が、「非人間性」に直結するのではない。

こうした社会観・人間観が、経済原理最優先の一元主義と、分かれ難く結びついてしまい、「優秀なスキル」を身に付ける欲望と「富」への欲望が表裏一体となるとき、「非人間性」の階段を昇り始めるのだと思う。

事の良し悪しを言いたいのではない。このような社会の在り方を、私たちは選んできた（あるいは否応なしに選ばされてきた）。「非人間的な人類」とは、自身のなかの競争や闘いを嫌う牧歌性、いい加減さや曖昧さ、怠惰、脆弱さ、不器用、といった要素を許さない人間のことであり（これらはまさに、「勝つこと」を妨害する要素だ）、そうした人間だけが、まさに「生き残れる」のである。

## 現代社会から弾き出される人びと

さて、いささか長めの枕となっているが、本稿は、「ふるさとの会&佐藤共同企画」によ

る第1回メールマガジン用の、「事例検討会議」ルポルタージュである。

この辺で方向転換しなくてはならないのだが、おそらくすでにお察しいただいているように、ここに述べたような社会は、必然的に、少なくない数の“脱落者”を生み出してしまふ。

ルールに乗って、より良い条件を手にしながらか生きていこうとするならば、事細かに決められたルールと複雑仕様になったシステムを的確に理解し、関係の調整力に長けていなくてはならない。さまざまな技術・技能と、判断力といったものも、より多く必要とされる。そしてサバイバルを勝ち抜いた人間には、社会的・経済的恩恵がもたらされる。

くり返すが、恩恵を享受するためには、社会への適応力と、システムやルールを理解し、習得するための知識や技能が不可欠になる。

心身に疾患や“障害”を抱えている人が、生きていく上でハンディキャップを背負わざるを得ないことは、すぐに理解していただけるだろうが、その困難は、時代の進展とともに大きくなっている。

さらには、「発達障害」や「精神障害」にあつて、“軽度”と見なされてきたおおくの人々も、目に見える形で社会からはじき出されはじめているし、引きこもり、不登校、自殺、ホームレスといったかたちで、社会への不適応が表出され、いっこうに減る傾向にない。

このように日々過酷さを増すサバイブな状況が、現代社会の基本的フォーマットである。

ここで取り上げる「ふるさとの会」がケアの対象としている人々は、多かれ少なかれ、こうした社会からの脱落を余儀なくされた、あるいは（それぞれのやり方で）自主的に拒否した人々だ、ということになる。

もちろん、筆者は単純な自己責任論には与しないし、「社会の犠牲者である」式の、単純な社会的被害者論にも与しない。言い換えれば「責任はどこに・誰に・あるのか」といった責任追及型の思考を、筆者は採っていない。原因は多くが重層的・複合的であり、ある場合にはシンプルである。

機縁さえ働けば、いつでも、どこでも、だれでも、サバイブの脱落者になるのであり、「れられる」の境界がきわめてボーダレスであることが、現代社会のフォーマットのもう一つの特徴である。

ふるさとの会の対人援助論は、このような基本認識に立って構想されている。

## 2.

### 「ふるさとの会」の援助論と事例検討会議

前述したように、筆者のこのコーナーは、事例検討会議の報告がメインになる。必要に応じて現場に足を運ばせていただき、そのレポートもさせていただく、といった内容になることも予想される。理屈の多い話になるかもしれないが、その点は、どうぞご容赦いただきたい。もちろん取り上げられる事例は、様々に加工されている。

「ふるさとの会」の事例検討会議は、月に1度開催されており、こんど73回を数えた。丸6年が過ぎたわけである。「ふるさとの会」は、元々ホームレスの人たちを支援するボラ

ンティア団体だったが、対象者が高齢化し、その抱えもつ困難が多様化し、なかには発達障害（自閉症スペクトラム障害・知的障害）とおぼしき利用者が増えてきたようだということで、筆者にお声がかかった。

この6年間、どんな話し合いがなされてきたかは、事例検討会議の主催者である的場由木さんの手で、『「生きづらさ」を支える本』（言視舎）としてまとめられている。これは「ふるさと支援論第1版」であり、第2版が更新中である。「ふるさと支援論」がどのような意義をもつか、どんな論議の筋道を経てまとめられていったかは、冊子の「解説」で書かせてもらっているので、ここでは繰り返さない。

### 事例検討会議を振り返ってみて

冊子が作られ、さらに1年が経過し、その間事例検討会議は続けられてきたわけだが、いま、感じていることを率直に述べてみる。

こうした対人援助論は、作り上げられたところで、次第に（あるいは一気に）形骸化していく、というケースをたどることが過半ではないかと思う。2年が過ぎ、3年が過ぎると、金科玉条のお題目のようになっていたり、作成に携わったメンバーがいなくなると、「なぜここに、こんなことが書いてあるのか」ということが、よく分からないものになってしまう。少なくとも筆者の教員時代にはそうであった。

ましてこの支援論は、マニュアル仕様にはなっていないから、有効なものとして継続させていくためには、相応の努力が必要とされる。

大事なことは（大事である分難しいことなのだが）、こうした援助論を、いつも現在進行形のものとして更新していく、という意味や姿勢が、どこまで共通確認されているかということ。まずは、そこにかかっているのではないかと思う。

完成形はない。論議のたびに、新たな知恵や知見がそこに加わり、改訂版が作られていく。このように、たえず更新されていく進行形のものであることを、いかに多くの現場のスタッフたちに共有してもらえるか。

二つ目は同じことを別の観点から述べることになるが、援助論を検討し、まとめるのは的場さんを中心とした相談室の人たちであり、あるいは議論に関係する一部の人たちである。このとき、「現場は現場。ここに書かれてあるようにうまくいくわけではない」と、そんなふうを考え、作る側と、実際に現場で利用者に接し、援助する立場にある人との間に距離ができてしまうということも、やはりよく見られる光景だろう。

しかしそうではない。議論の主体は、自分たちである。自分たちが改訂作業の当事者である。どこまでそう思ってもらえるか。

まとめの冊子ができあがったとき、これらの二点が、筆者が抱いていた危惧だった。

言い換えれば、いくら大論議を重ねて作り上げられた支援論であったとしても、現場のスタッフたちの役に立たなければ（役に立てようとしてくれなければ）、絵にかいた餅にすぎなくなる。しょせん理屈だ、実際の方は理屈のようにはいかない、という受け取られ方を、どうやって突破することができるか。

さて、冊子にまとめ挙げてさらに1年間議論を続け、筆者がひそかに抱いていた危惧はどうなったか。

結論は、次のようになる。

二つともに、見事に杞憂に終わった。

どれくらい経ってからか。少なくとも冊子ができる少し前くらいからだったと思うが、「待つ時期」とか、「ことばの上乗せ」とか、「風景」「抱き合い喧嘩」といった、支援論のことばが、スタッフの間で日常的に口にされるようになっていた。普段の何気ない会話にも、支援論のキーワードが、当たり前のように口にされていた。まずはこのことに驚かされた。

では、支援論とはなにか。なぜ現場に必要なのか。

一つ目。お勉強のためのお勉強をして、それを身に付けることが、最終の目標ではない。自分たちの実践していることを、自分たちの言葉で振り返り、話し合いの場に乗せ、まとめ合いをしていくものだということ。「まとめ」とされた言葉が、とりあえず、共通理解されること。そのようなものをつくり出す言語ゲームである。

いま、「言語ゲーム」ということばを使ったのでくり返すけれども、日々の援助実践のなかで、自分たちの感じていること、悩んでいること、疑問に思うことを、話し合いの場に乗せること（あらかじめテーマ設定されるから、そのテーマに即した話題に限定されるとしても、だ）。

そして論議し、もう一度、自分の感じていること、疑問に思っていることを整理し直す。そういう、「自分のことば」によって、くりかえし更新されていく作業（言語ゲーム）であり、まとめられた「支援論」は、そのさいに参照する、一つのマップである。

二つ目。何のためにマップが必要なのか。

現場で利用者さんと、なかなかうまくコミュニケーションが取れない、出口が見えない、関係が行き詰ってしまった。そういうときに、自分を助けるヒントするためである。そのためのものである。勉強会や事例検討会議は与えられるものではなく、自分の言葉でなされる言語ゲームなのだと強調したのも、ここに理由がある。

もちろん、事例検討会を粘り強く続けてきたことが、スタッフの人たちに定着させた大きな原因だったろう。くわえて事例検討会議のほかに、サポートセンターごとに職員が集まり、「対人援助勉強会」なる時間を設定したことも、とても重要な意味をもっただろうと思う。

的場さんが勉強会のたびに、支援論は変えていっていいのだ、変えていかななくてはいけないのだ、と力説していたことが、ゆっくりと伝わっていったのだとも思う。そして今年にはグループワークの後に、それぞれのグループの代表者が報告をするというやり方を取っているが、出されてくる報告がとてもレベルが高い。驚くほど高い。これはどのサポートセンターでも共通している。

要するに、筆者が抱いた二つの危惧は、まったく杞憂だったのである。

### 3.

#### 『生きづらさを支える支援論』の手前で

もちろん、まとめられた援助論に対し、スタッフの理解が深まり、各人が各人のやり方で活かしてくれることは大事なことである。ただし、もう一方ではケアの実践が、深くて密度の高いものになっていく必要がある。いくら立派な支援論としてまとめられたとしても、スタッフの皆さんが腕を上げてくれなくては元も子もないのである。

現場での一つ一つの対応はルーティンワークだけれども、真実は細部に宿る、である。1年はあっという間にすぎるが、1日は長い。まして働く環境や条件が厳しくなればなるほど、時間は味方をしてくれなくなる。

ではケアの質はどうすればよりよいものになるのか。良質さを維持できるのか。支援者として何が必要なのか。このテーマも、事例検討会議の当初の頃から重要なものの一つとして、幾度となく議論の俎上に上がってきたと思う。

思いつくままにあげる。( )内は具体例だが、必ずしもケースそのままでなく、筆者による加工が入っている)。

・健康、メンタルの状態、部屋の様子、相手の反応の仕方などの、小さなことや変化を見逃さないセンサー。

(ちょっとしたことで段差につまずいたり、物にぶつかったりする利用者さんがいた。スタッフの一人が、ひょっとしたらと思って眼の検査をしてみると、病気を発症していて、片目の視力が落ちていたことが分かった。そのため、失明するかどうかの瀬戸際で治療ができた、など)。

・利用者さんの言葉・行動・振る舞い・感情表現など、言語外から発信しているメッセージは何か。言葉の意味や感情表現の向こうで、何を伝えたがっているのか、それを的確につかむ洞察力や直観力。

(ある利用者は、職員やほかの利用者への暴言、嫌味、それが高じて外部機関への抗議など、ネガティブな言葉で周囲を振り回す人だった。事例検討会議での論議が進むなか、その当事者への反論や注意、要求は控え、語っていることに、とにかく耳を傾けらどうかということになった。家族との葛藤、将来への不安、自分は誰にも相手にされていないし、人の役にも立っていないという、帰属感や自尊感情の低減、心細さといった事実が、少しずつ見えてくるようになった。そうした視点が共有されるにつれ、やがて攻撃的な言葉も減っていった)

・オープンマインドとフェアネス。

ひと様相手の仕事だから、どうしても話が「合う・合わない」「好き・嫌い」という個人的な感情は働く。いわゆる“超困難ケース”も少なくない。でも、どんな利用者の人にも、職業人として、明るく、公正に関わっていくことが求められる。この持続のなかで、援助者としてのオープンマインドやフェアネスは涵養されていく。

ここまでが、「ふるさとの会」のケアの、セクション1ではないかと思う。

### **支援者（ケアワーカー）として**

つぎの問題。改めて触れておくが、「ふるさとの会」は社会サービスを提供する事業者ではあるが、世に言うところの専門職集団とは異なり、そこでなされる支援は「生活支援」と呼ばれている。以下は「生活支援」であるゆえに、いわば非専門家のプロ集団であるゆえのポイントである。

・生活支援職員は、まずは偉大なる「ゼネリスト」である。

ただしその中で、一つもしくは複数、「このことなら、この人だね」と言われるような、自身にとっての専門領域・得意領域を意図的に作り上げていくこと。これもまた重要であると思う。

（昨今、在宅医療が導入されるにつれ、「総合診療医」の存在が重要視されている。福祉・介護の現場にあっても同様、それはむしろ「総合生活支援」とでもいうべきケアである。従来の介護保険で言われてきた生活支援とは異なるし、障害者支援で言われる生活介護とも、大きくその内容を異にしている。

制度が作る枠を超え、ひとが生きて生活をしている、というそのことが生み出すあらゆる課題が支援の対象であり、領域となる。利用者さんたちが抱え持つ困難、トラブル、症状は、一人一人が異なっている。いわゆる“個別的でありかつ多様性そのもの”であり、くり返しになるが、生きていくために必要な、ありとあらゆる要望に応えなくてはならない。ときにはその人のライフヒストリーの聞き手になる、といった内容も、総合生活支援には含まれている）。

したがって、ふるさとの会のスタッフは、まずはゼネラルパートナーであることが求められる。

・次は、人とひととをコーディネートする力、ひとや場所や“こと”をつなげる力が重要だろう。

この人にはどんな支援が必要か。それらはどう組み合わせればいいのか。あるいはこのひとのできる“このこと”と、こちらの人ができる“このこと”をつなげれば、新しい別の“このこと”が可能になるのではないか、といった着眼、発想。

あるいは自分（たち）はどんな強みをもっているのか。逆に、欠けているもの、足りないものは何か。もし自分たちの強みだけで支援に入ったとき、どこまで通用するのか。欠けているものを補うためには、どこの、どのような外部機関との連携を図ることがベストか、といったように、連携を構想する力。それを可能にする人とつながる力。

加えて、「ふるさとの会」の最大のミッションは、どんな障害や疾病をもつ人でも、単身の高齢者でも、できるだけ長く地域生活ができるように支援すること。これである。このことは、地域コミュニティづくりにどう関与することができるのか、という課題を必然とする。

行政とソーシャルワーカー、医療関係者、自治会や地域おこしNPO、警察や消防などの地域防災関係。こうした機関や事業体と、どう連携するか。このことは、「ふるさとの会」の「生活支援」がもつもう一つのミッションである。地域のなかでどう存在感を増していくか、という課題は、今後、さらに重要になるはずである。

これらが、支援論を支援論たらしめるための、セクション2だろう。  
こんなことを、ふるさとの会の対人援助論がまとめられるまでの間に話し合ってきた。

すでに分量オーバーなので、詳細は次回に回したいが、「看取り」も、「生活支援」の一環として行おうとしているし、もう一つ、利用者ミーティングを通した「互助作り」という重要なテーマがある。

「ふるさとの会」の支援の両輪は、「安心できる住まいの提供」と「生活支援」である。「居住の安心」「終の棲家」、これらをどう提供できるか。ケア付き住宅をはじめとするこれまでの研究や提言は、すでに蓄積がある。

あまり褒めると、身びいきにもほどがある、とお叱りを受けるだろうから控えめに言うが、他の事業所では「超困難ケース」としてお引き取り願うケースにあっても「ふるさとの会」では当然のごとく受け入れ、当たり前のことのように自分たちのケアを実践していく。そして「超困難ケース」が「普通の困難ケース」になり、「ちょっとだけ困難ケース」になり、やがて「普通のおっさん・おばさん」になる。

冒頭、私たちの人間社会が、「非人間的人類」の方向に進んでいる、という渡辺格氏の指摘を紹介した。見たように、「非人間的人類」とは現代にあっては積極的な価値観として大きな流れをつくっており、この傾向は、さらに進むはずである。

「ふるさとの会」の取り組みは、それにたいする強い異議申し立て、というメッセージを、おのずと発信することになる。

これが、対人援助論がまとめられて1年を過ぎた昨今の、筆者の感想である。次回は、「看取り」をテーマに、事例検討会や対人援助勉強会で話し合われたことを報告したい。できれば、各サポートセンターで取り組まれ始めた「終活ミーティング」にも足を運ばせていただき、レポートしてみたいと思う

(2015・2・22)